

排泄に課題のある利用者に対する自己決定のアプローチ

ももち福祉プラザ

1. はじめに

ももち福祉プラザの生活介護事業（作業型）は、自閉スペクトラム症の特性や重度知的障がい、行動障がいのある利用者を複数名受け入れています。

軽作業を中心とした日課を組んでいます。作業場所などの環境設定や軽作業以外の課題提供など、個別化して利用者にあわせた支援を行っています。

自閉スペクトラム症と重度知的障がいのある利用者（以下、「Aさん」）について、自己選択の機会をつくったことで、長年の改善が難しかった排尿に関する行動に改善が見られたので、その取り組みをまとめました。



生活介護（作業型）の部屋の様子

【Aさんについて】

- ・診断は自閉スペクトラム症と最重度知的障がい、障害支援区分は5、療育手帳はA1を所持している
- ・発語や自発的な対人交流は少なく、会話や質問が難しいとオウム返しが多い
- ・何か伝えたいときや理解ができないとじっと見る、「うー」という声を出す
- ・作業能力は高く、手本を示すと理解ができ、数字、ひらがな、カタカナ、難しい漢字、簡単な指示文などの理解はできる
- ・身辺面や1日の通所の流れは、パターンとして習得しており、おおむね自立している

2. 取り組み前

指示の理解はパターンの一部となっており、場面に合わせた柔軟な行動が難しい様子でした。また、集団での作業中は、尿意があっても、声かけがないとトイレに行かずに失禁をしていました。そのため、15分～30分に1度、トイレに行くタイミングを伝える声かけをしていました。次に、職員からの指示ではなく、自分でトイレに行くタイミングを理解することを目標に、タイマーを活用することにしました。

- ・30分置きにタイマーが鳴るように設定する
- ・自分でタイマーのスタートを押して、鳴ったらトイレに行くようにする

タイマーを使ってトイレに行けるようになったが、失禁はなくなる

次第に、声かけがないと自分からスタートを押さなくなる

最終的に、自分からタイマーを押さず、タイマーを押すように促す支援が必要になり、改善にはつながらなかった



改めて失禁の原因を知るため、失禁が起きた曜日や時間帯、行っていた活動の内容、失禁時での残りタイマー時間、当日または前日夜の家庭での様子を家族から聞き取りしました。そして、その聞き取った記録を支援会議で、職員に共有しました。

一定期間、記録を取ったところ、“事業全体が慌ただしく、職員の目が届きにくい昼の作業が始まる時間帯に失禁が多いこと”や、“職員が近くにいると失禁が少ないこと”が分かりました。

トイレに行くタイマーを15分おきに設定しても1日に複数回失禁が起きていたため、失禁は“注目してほしい”という表現であると仮定し、職員の目に届きやすい席の準備などをしましたが、失禁の大幅な減少とはなりませんでした。

3. 取り組み後

(1) きっかけ

改めてAさんを観察すると、日々の生活の中で適宜時計を確認しながら過ごしている様子が見られ、Aさんなりに、“時間と活動をパターンとして理解”している様子が伺えました。

一方で、作業場面では指示を受けて従事することが多く、従事中に「あー」と作業室内に響くような発音があったり、指示を受けて間もなく失禁することがあったりしました。このことから、Aさんにとってやりたくない作業や活動もあるように見受けられました。